

「共通性」と「不確実性」からみる「ように」の全容

— 「ようだ」における事実と認識の関係をもとに —

岡 野 ひ さ の

1. はじめに

従来「ようだ」には「比喩・比況」と「推量・推定」の2つがあると考えられている。本稿は「ようだ」に関して指摘されるこの2つの用法をもとに、様々な「ように」を考察する。

しかし、従来の研究と本稿は根本的に異なる。それは次の点である。従来の「比喩・比況」とはある事柄をそれに類似した何かに話者が「喩える」ことであり、「推量・推定」とは何か分からない事柄をそれが何か話者が「推し量る」ことである。つまり「喩える」「推し量る」という話者の行動に注目している。それに対し本稿は、話者の行動ではなく、「よう」によって示される内容に注目する。ある事柄をその類似した何かに話者が「喩える」のは、その2者の内容に明らかな「共通性」が認められるからであり、何か分からない事柄を話者が「推し量る」れば、その内容は当然「不確実性」を持つ。このように、従来の研究が話者の行動に着目しているのに対し、本稿は「よう」によって表される内容の「共通性」と「不確実性」に着目する。

そして「よう」が「共通性」と「不確実性」を表すことにより、「ように」は様々な用法を分化させたと考えられる。共通性を表す場合は、何と何が共通なのかを明確にすることにより、多様な用法の3分類を試みる。不確実性を表す場合は、そのモダリティ的な意味を統一的に説明することが可能になることを示す。

以下まず2節で、森本(1995)をもとに「ようだ」の「比喩・比況」と「推量・推定」が事実とその認識に関してどのように異なるのかという点から「共通性」と「不確実性」の意味を確認した後、前田(2006)による「ように」の4分類を示す。3節では、その4分類のうち「共通性」を表す用法について、森本(1995)の研究にも触れながら考察する。4節では「不確実性」を表す用法について、5節では「ように」と「みたいに」の違いについて考察する。

2. 森山(1995)による分類と前田(2006)による分類

2.1 森山(1995)による分類と本稿の分類

森山(1995)は「ようだ」「ような」「ように」に関して、類似した2者が同一かどうかという関係を示すものであり、その関係は「不明」「不一致」「包含」であるとする。さらにそれぞれの意味は「推量」「比喩」「例示」になるとし、「ように」に関しては次のような例を示す。(1a)が「不明、推量」の、(1b)が「不一致、比喩」の、(1c)が「包含、例示」の例である。

- (1) a. 遠くで飛行機が落ちたように見えた。(p.502)
- b. 負債が、鼠が子を生むように増える。(p.510)
- c. 昨日見た映画のように、大衆路線の映画は楽しいが深みがない。(p.519)

「不明、推量」と「不一致、比喩」の違いは、従来「ようだ」に関して指摘されていた「推量・推定」と「比喩・比況」の違いである。次の(2)を例に両者の違いを確認する。

- (2) a. (急な雨に加えて大きな音がし始めた。)雷がなっているようだ。
- b. (打ち上げ花火が始まった。)まるで雷がなっているようだ。

(2)において森山(1995)が指摘する類似した2者とは、事実とその認識「雷がなっている」である。(2a)が「不明、推量」で(2b)が「不一致、比喩」という違いが現れるのは、(2a)の話者は事実が何かを知らないのに対し、(2b)の話者は事実が「打ち上げ花火の音で雷がなっているのではない」と知っているからである。つまり事実に関して話者が「未知」か「既知」かの違いである。

話者が事実に関して未知であれば、「Xようだ」のXは「不確実」な内容となる。一方、既知であれば、Xと事実との間に何らかの「共通性」が認められると言える。つまり「不明、推量」は「不確実性」を表し、「不一致、比喩」は「共通性」を表す。では、「包含、例示」はどのように考えたらいいか。「包含、例示」は事実に関して未知な事柄は存在せず、「不一致」の一つと考えられる。この点から「共通性」を表すと言える。

2.2 前田(2006)による分類と「よう」の意味

様々な「ように」を分類した先行研究としては、前田

(2006)がある。前田(2006:70)は「XようにY」のXの意味と、Yに対するXの構造的な位置づけから、以下の4つに分類する。ただし(ア)(イ)(ウ)(エ)の記号は、本稿筆者が説明の便宜上つけ加えた。

	主節に対して		前件の タ形	「に」 の省略
	修飾・付加的	必須・補足的		
認識	(ア)〈類似事態〉	(イ)〈思考・知覚内容〉	可 能	不可 能
まちのぞみ	(ウ)〈結果・目的〉	(エ)〈命令・祈願内容〉	不可 能	可 能

(ア)(イ)(ウ)(エ)の例として、前田(2006)は以下のような文を示す。

- (ア)a. 患者はよろめくようにそこに座った。(p.2)
- b. 美しい花でも眺めるように愛娘を見つめた。(p.3)
- c. 人に生命があるように、植物にも生命がある。(p.12)
- (イ)a. この答えは間違っているように思う。(p.4)
- b. 私には父が急に元気になったように思えた。(p.4)
- (ウ) 3時に到着できるようにタクシーに乗ることにした。(p.3)
- (エ)a. 明日までに仕上げるように部下に命令した。(p.4)
- b. 雨が降らないように神に祈った。(p.4)

上記の表から分かるように前田(2006)は、「ように」の前件が「認識」か「まちのぞみ」という内容的な視点と、後件に対して前件が「修飾・付加的」か「必須・補足的」という文構造的な視点の、2つの視点から分類している。以下、本稿では「共通性」という観点から(ア)を、「不確実性」という観点から(イ)(ウ)(エ)を考察する。さらに「共通性」という観点においては「包含、例示」(森山1995)に関して、「不確実性」という観点においては「ようにする」という表現に関しても考える。

具体的な考察に入る前に、次の表現を例に「よう」が何を表すのかを考える。

- (3)a. 物は言いようだ。
 - b. 考えようによっては、失敗も悪いことではない。
- (3a)の「言いよう」は「どう言うか」、(3b)の「考えよう」は「どう考えるか」を表す。つまり「よう」はある動きを「どう」するか、簡潔に言う「動き方」を表すと言える。そこで(3b)は「考え方によっては」と言い換えも可能である。しかし(3a)は「物は言い方だ」とすると不自然な感じがする。「言い方」は例えば「早口で」や「ぶっきらぼうに」などを意味する。一方「物は言いようだ」の「言いよう」は「早口で」や「ぶっきらぼうに」などではなく、表現の仕方、さらには言う内

容を意味する。このように動き方だけではなく、動きによって産出される何か、つまり「産出物」を表す場合もある。この点から「よう」は産出物を含む動き方を表すと言える。

3 共通性を表す「ように」

3.1 (ア) <類似事態>

(ア) <類似事態>としてまとめられているのは、異なる2者の「共通性」を表す「ように」である。前田(2006)は(アa)を「様態」、(アb)を「比喩」、(アc)を「同等」と呼ぶ¹。

- (ア再)a. 患者はよろめくようにそこに座った。
- b. 美しい花でも眺めるように愛娘を見つめた。
- c. 人に生命があるように、植物にも生命がある。

(ア)の各文における共通性とは何であろうか。(アa)は足元がふらつきながら「座る」様子に「よろめく」様子との共通性を見だし、(アb)はその美しさを賞賛し満げに「愛娘を見つめる」様子に「美しい花などを眺める」様子との共通性を見だししている。換言すると(アa)(アb)ともに「XようにY」のYの動きにXの「動き方」との共通点を見だし、Xを提示することによってYの動きを明確にしている。

では(アc)は何に共通性があるのか。(アc)は「人」と「植物」の双方が「生命がある」という共通性を持つのであり、「動き方」の共通性は見いだせない。(ア)を記号で表すと次のように、(アa)(アb)は「XようにY」となるが、(アc)の共通性を示すためにはXを「P1にQ」と、Yを「P2にもQ」と表さざるを得ない。

- (ア') a. (患者は) XようにY
- b. XようにY
- c. P1にQように、P2にもQ

Yの動きにXの動き方との共通性を見出す(アa)(アb)とは異なり、(アc)はP1とP2が同じQに結びつく、つまりQを共有するという共通性がある。この点から本稿は共通性を表す「ように」を、(アa)(アb)のように産出物を含む「動き方」に共通性を見出すタイプと、(アc)のようにP1とP2がともにQを共有するタイプの2つに大別する。そして前者を「動き方タイプ」と、後者を「共有タイプ」と呼ぶ。さらにこの2者以外に「包含タイプ」が共通性を表す「ように」には存在する。これについては次節で詳しく述べる。

3.2 (アc)「同等」と共有タイプ

前田(2006)は(アc)のような「同等」に関して、「二つの事象が等しく成立する・事実である、というこ

¹ 再掲の場合は参考文献の掲載頁を省略する。

とを示すものである（p.23）」と説明する²。（アc）を基本形とするが、その周用的用法として、「[する]を用いた表現」と「前触れの表現」と「～と同じように」の3種類を挙げ、「[する]を用いた表現」と「～と同じように」の例として次の例を示す³。（4b）は「～のと同じ」を除いても文意に変化は生じない。

- (4) a. みんながしているように、網棚は書物を置く場所にしてしまった。（p.25）
 b. あなたが、林や石塚さんの正体を調べたのと同じように、私もあなたの正体を調べたのです。（p.30）

(4a) の「している」が示すことを具体的に省略されている「私」を補い、(4b) の省略できる部分を括弧でくくれば、以下のように記号で表すことができる。P1に結びつくQとP2に結びつくQにテンスや目的語など若干の違いがあっても、ほぼ同じと考えられる場合は同じQとする。

- (4) a. P1がQように、P2もQ
 b. P1がQ（のと同じ）ように、P2もQ

これらは（ア'c）と同じで、P1とP2が同じQと結びつく共有タイプである。

「前触れの表現」に関しては、その多様性を示し、次のような例を示す。

- (5) a. Gホテルは女中が言ったように、堀江の旅館からすぐであった。（p.25）
 b. 後で詳しく述べるように、日本人は宗教にあまり関心がない。（p.26）
 c. 調書？そんなものは思うように書けよ。（p.26）
 d. 先生が書いたように書いてごらん。（p.27）
 e. シングルの女は、喜怒哀楽を共にする情念の世界が苦手。「男を追いかけるより布団かぶって寝た方がまし」と真木幸代さん（仮名三四歳）が言うように気質が淡泊。（p.27）

(5a) から (5e) までの例がすべて（アc）と同じ共有タイプなのだろうか。結論から言えば、否である。(5a) (5b) は共有タイプであるが、(5c) は動き方タイプ、(5d) は共有タイプと動き方タイプの中間的な存在であり、そして (5e) は包含タイプである。

まず (5a) (5b) を確認する。それぞれ省略されている部分を、遂行的動詞も含めて補えば、以下のようになる。

- (6) a. (Gホテルは)「堀江の旅館からすぐだ」と女中が言ったように、「堀江の旅館からすぐである」と実際に認識した。

- b. 「日本人は宗教にあまり関心がない」と後で詳しく述べるように、「日本人は宗教にあまり関心がない」と今ここでも述べる⁴。

これを記号で表すと以下ようになる。(6) の下線部がP1またはP2である。

- (6) a. (Gホテルは) QとP1ように、QとP2
 b. QとP1ように、QとP2

このように (6a) (6b) とともにP1とP2がQを共有するタイプである。(6) は省略された部分を補った文、つまり発話の根本にある「ように」が用いられる論理構造を示した文であるが、実際の表現は (5a) (5b) である。これらを記号化すると次のようになる。ただしQはP2のテンスとなる。

- (5) a. (Gホテルは) P1ようにQ
 b. P1ようにQ

このように表現上では通常 (5) のように前件のQと後件のP2が表現されない。P2が表現されないのは、「実際に認識した」「今ここでも述べる」がQの認識や言述を表す行為であるためと考えられる。

では、(5c) (5d) (5e) はどうであろうか。まず (5c) から考える。(5c) は以下の (7) とも言え、それを記号化すれば (7) となり、P1やP2は存在しない。

(5c再) 調書？そんなものは思うように書けよ。

(7) 調書？そんなものは書きたいように書けよ。

(7) (調書？そんなものは) XようにY

(7) から考えると、(5c) は「どう書くか」を「書きたいように」と指示していると考えられる。(5c) の「よう」は産出物を含む「書き方」を表し、明らかな動き方タイプである。

次に (5d) であるが、これは動き方タイプと共有タイプの間接的な存在だと考えられる。(5d) に省略されている「あなた」(P2) を補うと (5d') と記号化できる。

(5d再) 先生が書いたように書いてごらん。

(5d') P1がQように、P2もQ（ごらん）

また (5d) のほかに前田 (2006) は (8) の例を示す。(8) の「言われた」内容つまり「やった」内容をQとすると、「やりました」は「Qを実行しました」となり、「実行しました」はP2と考えられる。すると (8) と記号化できる。

(8) 言われたようにやりました。

(8) QとP1ように、QをP2

このようにどちらも共有タイプのパターンを持つ。しかし、話者の意図することを考慮すると産出物を含む動き方を意味しているとも考えられる。特に (5d) の話

² 前田 (2006) は (アa) (アb) における「XようにY」のXが現実ではないとし、この点が (アc) は異なると考える。すでに述べたように本稿はこの考え方を採らない。

³ 前田 (2006) の多くの例文は小説などの部分的引用である。その原典を記すと非常に煩雑になることから、本稿では原典を省略する。なお (4a) は前半の文を省略する。

⁴ この用法については前田 (2006:28-29) も参照。

者は「先生 (P1) とあなた (P2) の双方が同じ「書く」(Q) を共有することを言いたいわけではなく、聞き手(あなた) に先生の産出物を含む書き方を手本にして書くことを促している。(8) も「言われた」(P1) ことと「実行した」(P2) ことの双方が同じ (Q) である点を言いたいとも考えられるが、実行の仕方が言われた仕方と共通している点を主張したいとも考えられる。このように (5d) と (8) は動き方タイプと共有タイプの中間的な用法だと考えられる。

(5e) はどうであろうか。(5e) の後の文に省略されている部分を補い、さらに若干語順を変えると次の (9) となり、それを記号化すると (9') となる。

(5e再) シングルの女は、喜怒哀楽を共にする情念の世界が苦手。「男を追いかけるより布団かぶって寝た方がまし」と真木幸代さん(仮名三四歳) が言うように気質が淡白。

(9) 真木幸代さん(仮名三四歳) が「男を追いかけるより布団かぶって寝た方がまし」と言うように、シングルの女は気質が淡白。

(9') P1 が Q1 ように、P2 は Q2

これは (アc) と同じで、(9) のように一文にすると P2 を省略することはできない。しかし (アc) の P1 と P2 が共有するのは同じ Q であるのに対し、(5e) の Q1 と Q2 は大きく異なり、「Q1 \subset Q2」(Q1 は Q2 に含まれる) という関係にある。また P1 と P2 も「P1 \subset P2」(P1 は P2 に含まれる) の関係になっている。「P1 が Q1」を X、「P2 が Q2」を Y とすれば「X \subset Y」であり、それが「X ように Y」と表されている。これは「ように」が表す「包含、例示」(森山1995) の典型と考えられる。前述のように、本稿ではこれを「包含タイプ」と呼ぶ。

(9) に対し、森山 (1995) の例 (1c) は共有タイプである。森山 (1995) は (1c) について (10) と言い換えられるとする。(1c) (10) は記号で表すと (1c') (10') となり、共有タイプとなる。

(1c再) 昨日見た映画のように、大衆路線の映画は楽しいが深みがない。

(10) 昨日見た映画がそうであるように、大衆路線の映画は楽しいが深みがない。(p.520)

(1c') P1 のように、P2 は Q

(10') P1 が Q ように、P2 は Q

これは「X \subset Y」を表しているのではなく、「P1 \subset P2」を表しているに過ぎない。そこで「ような」を用いて次のように表すことができる。

(11) 昨日見た映画のような大衆路線の映画は楽しいが深みがない。

以上のように前田 (2006) が「同等」と分類する用法の中には、産出物を含む動き方タイプ、共有タイプ、包含タイプ、の3タイプが混在する。特に産出物を含む動き方タイプは「比喩・比況」のイメージが強いため、そ

れ以外の用法と区別されやすい。しかし共通性という観点から見れば、「X ように Y」の Y に、X の産出物を含む動き方との共通性を見いだしている点はどれも同じである。

3.3 「名詞のように」

前田 (2006) は「名詞のように」も3分類し、以下の例を示す。(12a) は様態の、(12b) は比喩の、(12c) は同等の、(12d) は例示の例とする。

(12) a. かねがね一度お伊勢様に参りたいと口癖のように言っておりました。(p.33)

b. 那美子は石像のように黙って座ったままであった。(p.33)

c. 那美子は普通の世間並の妻のように夫を愛し、家庭に執着している(後略)。(p.34)

d. 多くの鳥のように一夫一婦制の動物では、下位のオスに生殖のチャンスがないことは、必然的に一部のメスをも生殖からしめだすことになる。(p.34)

(12a) の「口癖」は「繰り返し何度も言う」という「言い方」を表し、(12b) の「石像」は「何も言わず動きもしない」という「(マイナスの) 動き方」を表す。(12a) (12b) は動き方タイプである。(12c) は語順を少し変えると「普通の世間並の妻のように、那美子は夫を愛し家庭に執着している」となり、「普通の世間並の妻」を P1、那美子を P2 として記号化すれば「P1 のように、P2 は Q」となる。これは前件の Q が顕在化していない共有タイプである。(12d) は「多くの鳥のような一夫一婦制の動物」でも適格であり、(11) と同じである。これも共有タイプである。

以上から次のように言える。動き方タイプでは名詞がなんらかの「動き方」を表している。共有タイプでは P1 と Q、P2 と Q の関係がともに主部と述部の関係になっているために、「P1 のように P2 は Q」が可能になる。あるいは「P1 \subset P2」の関係である。

4 「不確実性」を表す「ように」

4.1 (イ) <思考・知覚内容>

前田 (2006) の (イ) <思考・知覚内容> は、次の (13) に示すように、その内容を「ようだ」を用いて表すことができる。

(イ再) a. この答えは間違っているように思う。

b. 私には父が急に元気になったように思えた。

(13) a. この答えは間違っているようだ。

b. 父が急に元気になったようだ。

これは森山 (1995) の「不明、推量」、つまり話者が事実に対し未知である「不確実性」を表す。

「思う」は一般に助詞「と」を伴うが、「と思う」と「ように思う」の違いは何かという問題がある。この問題について (イa) の文を例に考える。

(イa再) この答えは間違っているように思う。

(14) この答えは間違っていると思う。

(14) は明確に自信を持って「思う」のに対して、(イa) は半信半疑で「思う」という印象を受ける。これは先に示した「XようにY」がXの「不確実性」を表すことから、(イa) が半信半疑で「思う」という印象を与えると考えられる。

4.2 (ウ) <結果・目的>

(ウ) <結果・目的>については(15)のような「ために」との違いが問題になる。

(ウ再) 3時に到着できるようにタクシーに乗ることにした。

(15) 3時に到着するためにタクシーに乗ることにした。

すでに多くの指摘があるように、後件の動作主が前件の成立をコントロールできれば(15)のように「ために」が、コントロールできなければ(ウ)のように「ように」が用いられる。後件の動作主によって前件の成立がコントロールできないとは、つまり前件の成立が「不確実」であることを表す。そこで「不確実性」を表す「ように」が用いられると考えられる。

ここで注意すべきことがある。2で述べたように「ようだ」は「不確実性」を表す場合も、「共通性」を表す場合と同様に、未知の事実とその認識とのあいだに「類似性」がある。この点は不確実性を表す(イa)(イb)においても指摘できる。しかし(ウ)には類似性がまったく存在しない。つまり(ウ)は「XようにY」の「X」が「不確実性」を表すという点だけを利用したモダリティ的な用法と考えられる。この点はこれから考察するすべての不確実性を表す「ように」にも指摘できる。

4.3 「ようにする」

「ようにする」も不確実性を表す場合がある。例えば次の(16a)のような場合である。類似の表現として(16b)がある。

(16) a. 明日から早く来るようにします。

b. 明日から早く来ます。

(16b)は「明日から早く来る」という自分の意志あるいは決意を明瞭に表すのに対して、(16a)は「明日から早く来る努力をする」程度の意志あるいは決意を表す。つまり「ように」が表す不確実性によって、「明日から早く来る」ということの実現が明確に示されない。次の

ように話者の意志ではない場合も同様である。

(17) a. 明日から早く来るようにしてください。

b. 明日から早く来てください。

(17a)は「努力してください」という意味合いが含まれ、(17b)よりやわらかな印象を与える。

しかし同じ「ようにする」であっても、「ようになる」と対になる場合は不確実性による意味合いは生じない。例えば次のような場合である。(18b)と対になる(18a)は不確実性を表さない。

(18) a. この道を通れるようにする。

b. この道が通れるようになる。

(16a)(17a)と(18a)の違いは次の点である。(16a)(17a)には(16b)(17b)のような不確実性を含まない類似の表現が存在するが、(18a)にはそのような表現が存在しない⁶。

(18)の「Xする」「Xなる」は、Xが他の品詞においても表され、各品詞では次のように表される。

(19) a. この道を市道にする。この道が市道になる。

b. この道をきれいにする。この道がきれいになる。

c. この道を広くする。この道が広くなる。

名詞と形容動詞には助詞「に」が付加され、形容詞は語尾の「い」が「く」に変化するのと同じように、動詞の場合は「ように」が必須になると考えられる。(18a)は同じ「ようにする」であっても(16a)(17a)とは異なる。(16a)(17a)は「不確実性」を表すが、(18a)は形態的な補文標識であり「不確実性」は表さない。なお、(18b)「この道が通れるようになる」の「ように」も同様に補文標識であると考えられる。

4.4 (エ) <命令・祈願内容>

(エ)は命令と祈願に分かれるが、まず命令に関して考える。(エa)は(20)のようにパラフレイズできる。聞き手に対する命令を明示した発話を助詞「と」によって結びつければ(20a)と、Xが名詞の場合「Xを命令した」となることから命令内容を文法的に名詞化して結びつけば(20b)となる。

(エa再) 明日までに仕上げるように部下に命令した。

(20) a. 「明日までに仕上げろ」と部下に命令した。

b. 明日までに仕上げることを部下に命令した。

(20a)の「明日までに仕上げろ」は「仕上げろ」が命令を明示し、単独で命令の意味を持つ。また、(20b)の「明日までに仕上げること」単独でも部下に向かって言え

⁵ 前田(2006:78-79)は「ようにする」をまとめて考察し、本稿の(16a)(17a)のような「ように」を「変化」と呼ぶ。これは本稿も支持する。しかし、この他に「社長がスムーズに仕事をできるようにするのは、秘書たる者のつとめである」や「大声でいい、城内にまぎれ入っている敵方の問者の耳に入るようにした」のような「ように」を「調整」と呼ぶ。本稿ではこの「調整」を以下のように考える。前者の「社長がスムーズに仕事をできるようにする」は「社長」を主語にして「社長がスムーズに仕事をできるようにする」と言えることから、(18a)と同じグループに属する。一方後者は「城内にまぎれ入っている敵方の問者の耳に入るように、大声でいい」と言いかえることができることから、(16a)(17a)と同じグループに属すると考える。

ば、同じく命令の意味が生じる。この点は(エa)に関しても同様に指摘できる。部下に対して直接「明日までに仕上げるように」と言えば、やわらかな命令の意味となる。つまり部下に直接命令する発話としては「明日までに仕上げろ」「明日までに仕上げること」「明日までに仕上げるように」のどれも可能である⁶。しかし印象は異なり、その強制力は「仕上げろ」が最も強く、「仕上げること」が続き、「仕上げるように」が最も弱くなる。「仕上げるように」が最も弱く感じられるのは、「ように」によってその成立が「不確実性」を表すためだと考えられる。

次に祈願に関して考えるが、命令と祈願は大きく異なる点がある。

(エb再) 雨が降らないように神に祈った。

命令(エa)の聞き手である部下がすべきことは「明日までに仕上げる」ことであるのに対して、祈願(エb)の聞き手と考えられる神のすべきことは「雨が降らないようにする」ことである。神が「雨が降らないようにする」ならば「雨が降らないようになる」と考えられ、「ように」は形態的な補文標識として必須である。実際、祈願の言葉は「雨が降らないように／雨が降りませんように」である。

また神に祈るのは、話者(祈願者)がその祈願内容を望み、かつその成立をコントロールできないためである。これは<結果・目的>と同じであり、祈ることは祈願内容を実現するための一つの方策とも考えられ、(21a)のように他の方法も可能である。また逆に(ウ)の話者が必死であれば、(21b)のように神に祈ることも可能である。

(21) a. 雨が降らないようにてるてる坊主を作った。

b. 3時に到着できるように神に祈った。

4. 2でも述べたように、<命令・祈願>においても類似する他者は存在せず、「ように」が不確実性を表す点を利用した用法である。

5 「ように」と「みたいに」

最後に「ように」と「みたいに」の違いを考える。次のように、(ウ)(エ)の「ように」は「みたいに」に言い換えることはできない。

(22) a. *3時に到着できるようにタクシーに乗ることにした。

b. *明日までに仕上げるみたいに部下に命令した。

c. *雨が降らないみたいに神に祈った。

一方、次のように(ア)の「ように」はすべて「みたいに」に言い換えることができる。ただし、口頭表現的な

印象が変わる。

(23) a. 患者はよろめくみたいにそこに座った。

b. 美しい花でも眺めるみたいに愛娘を見つめた。

c. 人に生命があるみたいに、植物にも生命がある。

この点から「みたい」は共通性を表すが、不確実性は表さないと考えられる。しかし(2)の「ようだ」はabともに、次のように「みたいだ」と言い換えることができる。

(24) a. (急な雨に加えて大きな音がし始めた。) 雷がなっているみたいだ。

b. (打ち上げ花火が始まった。) まるで雷がなっているみたいだ。

不確実性を表す(24a)が適格であり、「みたい」がまったく不確実性を表さないわけではない。「みたいだ」は不確実性を表しえる。

では「みたいに」はどの程度まで不確実性を表しえるのであろうか。(イ)の「ように」を「みたいに」に言い換えると、次のようにabで許容度が異なる。

(25) a. ??この答えは間違っているみたいに思う。

b. 私には父が急に元気になったみたいに思えた。

意志動詞「(私は)思う」は許容度が低く、非意志動詞「(私には)思える」は許容度が高い。次のように(25ab)の「(私は)思う」と「(私には)思える」を入れ替えて(26)としても同様の点が指摘できることから、文意の違いは関係がないと言える。

(26) a. 私にはこの答えが間違っているみたいに思える。

b. ??父が急に元気になったみたいに思った。

他の<思考・知覚内容>を表す動詞には「見える」「聞こえる」などがある。次のように「見える」「聞こえる」に関しては、「ように」と「みたいに」がともに許容される。

(27) a. (私には) 遠くで飛行機が落ちたように／みたいに見えた。

b. (私には) 雷がなっているように／みたいに聞こえる。

これらは次のように意志動詞の「見る」「聞く」では許容されない。

(28) a. *(私は) 遠くで飛行機が落ちたように／みたいに見た。

b. *(私は) 雷がなっているように／みたいに聞く。

(27)(28)における許容度は「みたいに」と「ように」で変わらず、非意志動詞では許容されるが、意志動詞では許容されない。

前述のように、「みたいに」においては「思う」と「思える」に関しても、この非意志動詞では許容されるが、意志動詞では許容されないという点が指摘できる。一方

⁶なぜ「仕上げること」と「仕上げるように」という文末表現が存在するかという点について、本稿はともに遂行動詞的な「(部下に)命令した」が省略されていると考える。

「ように」は、非意志動詞「思える」だけではなく意志動詞「思う」も許容され、他の動詞との一貫性を欠く。

では、なぜ「ように」は「思う」が許容されるのであろうか。それは(ウ)(エ)と同じように、「ように」の不確実性を利用しているためと考えられる。つまり(イa)と(14)の比較で示したように、「と思う」に対するよりやわらかな表現として、「ように思う」が許容されると考えられる。

(イa再) この答えは間違っているように思う。

(14再) この答えは間違っていると思う。

一方「みたい」は基本的に共通性を表し、不確実性は文末の「みたいだ」、および「みたいに」に認識を表す非意志動詞「見える」「聞こえる」「思える」等が後続する場合に限られると言える。

6 まとめ

本稿は「ようだ」が持つ「共通性」と「不確実性」という2つの観点から、「ように」を考察した。さらに「みたいに」との相違点にも触れた。まとめると、以下のようになる。

共通性を表す「ように」においては何らかの形で2者間に共通性が存在する。典型的な動き方タイプの場合は、「XようにY」のYと産出物を含むXの動き方とのあいだに共通性が存在する。共有タイプの場合は、その根本にある論理構造において「ように」の前件のP1と後件のP2が同じQに結びつく、つまり共有するという共通性が存在する。さらに「XようにY」が「X<Y」(XがYに含まれる)関係にある包含タイプが存在する。

不確実性を表す「XようにY」においてはXが不確実になる。この点から以下の理由の説明が可能になる。「と思う」より「ように思う」のほうが半信半疑である印象を受ける理由、「来ます」より「来るようにします」のほうが意志や決意が弱い印象を受ける理由、「Xために

Y」と異なり「XようにY」はYの動作主によってXの成立がコントロールできない理由、これらはすべて「XようにY」のXが不確実性を表すことから説明される。また、不確実性を表す「ように」の多くは、「ようだ」に必須である類似性を持つ他者が存在しない。これらは「ように」が表す不確実性を利用したモダリティ的な用法であると言える。

「みたいに」と「ように」の違いは、以下の点である。「みたいに」は基本的に共通性を表し、不確実性は「(私には)見える／聞こえる／思える」のような認識を表す非意志動詞が後続する場合にのみ許容される。つまり「ように」は「みたいに」と比べ、より広い不確実性を表す用法を持つと言える。

このように「ように」は、「みたいに」より広い用法をもち、また「共通性」と「不確実性」を表すという性質を利用して、多種多様な用法を持つ。そしてこの点が「ように」の理解を難しくしていると考えられる。

参考文献

- 安達太郎(1997)「「なる」による変化構文の意味と用法」『広島女子大学国際文化学部紀要』第4号, pp.71-84.
- 仁田義雄(1991)『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房.
- 前田直子(2006)『「ように」の意味・用法』笠間書房.
- 益岡隆志・田窪行則(1992)『基礎日本語文法—改訂版—』くろしお出版.
- 森山卓郎(1995)「推量・比喩比況・例示—「よう／みたい」の多義性をめぐって—」『宮地裕・敦子先生古稀記念論集日本語の研究』pp.493-526, 明治書院.
- 森山卓郎・仁田義雄・工藤浩(2000)『日本語の文法3 モダリティ』岩波書店.
- 山梨正明(1986)『発話行為』大修館書店.